

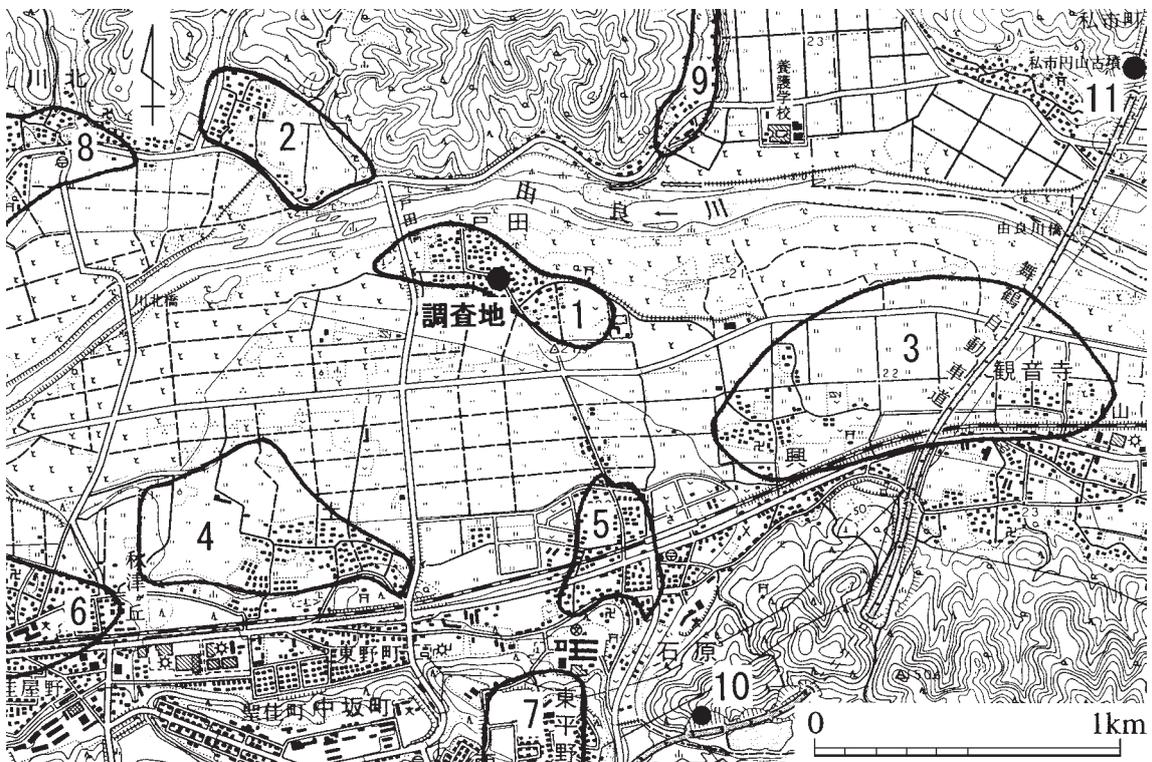
2.戸田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

戸田遺跡は、福知山市字戸田に所在する。由良川中流域の福知山盆地の西部に位置し、盆地を東から西に向かって流下する由良川南岸の自然堤防上に立地する。土師器、須恵器などの遺物散布地として遺跡地図に搭載されている。今回の調査は、由良川中流部改修事業の築堤工事に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。

調査は、平成19・20年度にわたって実施した。平成19年度の調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第1係長小池寛、主査調査員柴暁彦、調査第3係主任調査員引原茂治である。平成20年度の調査担当は、調査第2課調査第1係長小池寛、主任調査員引原茂治、主査調査員柴暁彦である。

調査にあたっては、福知山市教育委員会をはじめ、京都府教育委員会、地元戸田自治会などの関係諸機関からご協力いただいた。特に、福知山市教育委員会の八瀬正雄氏、松本学博氏、永谷隆夫氏からは、現地で多くのご指導、ご教示をいただいた。記して感謝したい。調査作業では、



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 福知山東部)

- 1.戸田遺跡 2.上ヶ市遺跡 3.興・観音寺遺跡 4.土遺跡 5.石原遺跡
6.前田遺跡 7.上野平遺跡 8.川北遺跡 9.立石遺跡 10.ヌクモ古墳群 11.私市円山古墳

地元の方などに参加していただいた^(注1)。

なお、調査に係る経費については、国土交通省近畿地方整備局が全額負担した。

2. 位置と環境

由良川中流域には自然堤防上に営まれた遺跡が多数確認されている。今回の調査地付近には、弥生時代から中世にかけての集落跡である観音寺遺跡や興遺跡・土遺跡などがある。また、東隣の綾部市域では、味方遺跡・青野遺跡・青野西遺跡などが知られている。丘陵部には古墳が多く分布している。古墳時代中期のヌクモ古墳群では、盤龍鏡などが出土した。北東側の綾部市境には、府内最大級の円墳である私市円山古墳が位置する。中世の遺跡として、調査地から由良川を挟んだ北側の台地上に、有力者の館と考えられる建物跡群が検出された上ヶ市遺跡がある。

戸田の集落の東端に浦嶋神社という小社があり、その社頭に「お沼(おぬう)」と呼ばれる小さい池がある。もとは神社背後の由良川河川敷にあったが、今回の築堤工事に伴い、現在地に移転された。この池は、白い岩を介して龍宮城の大きな沼に直結しており、この池で願い事をするするとすぐに乙姫に伝わり、特に天気に関する願い事は必ず聞いてもらえる、という伝説がある。過酷な自然と相対せざるを得なかった土地柄を反映した伝説と言える。(引原茂治)

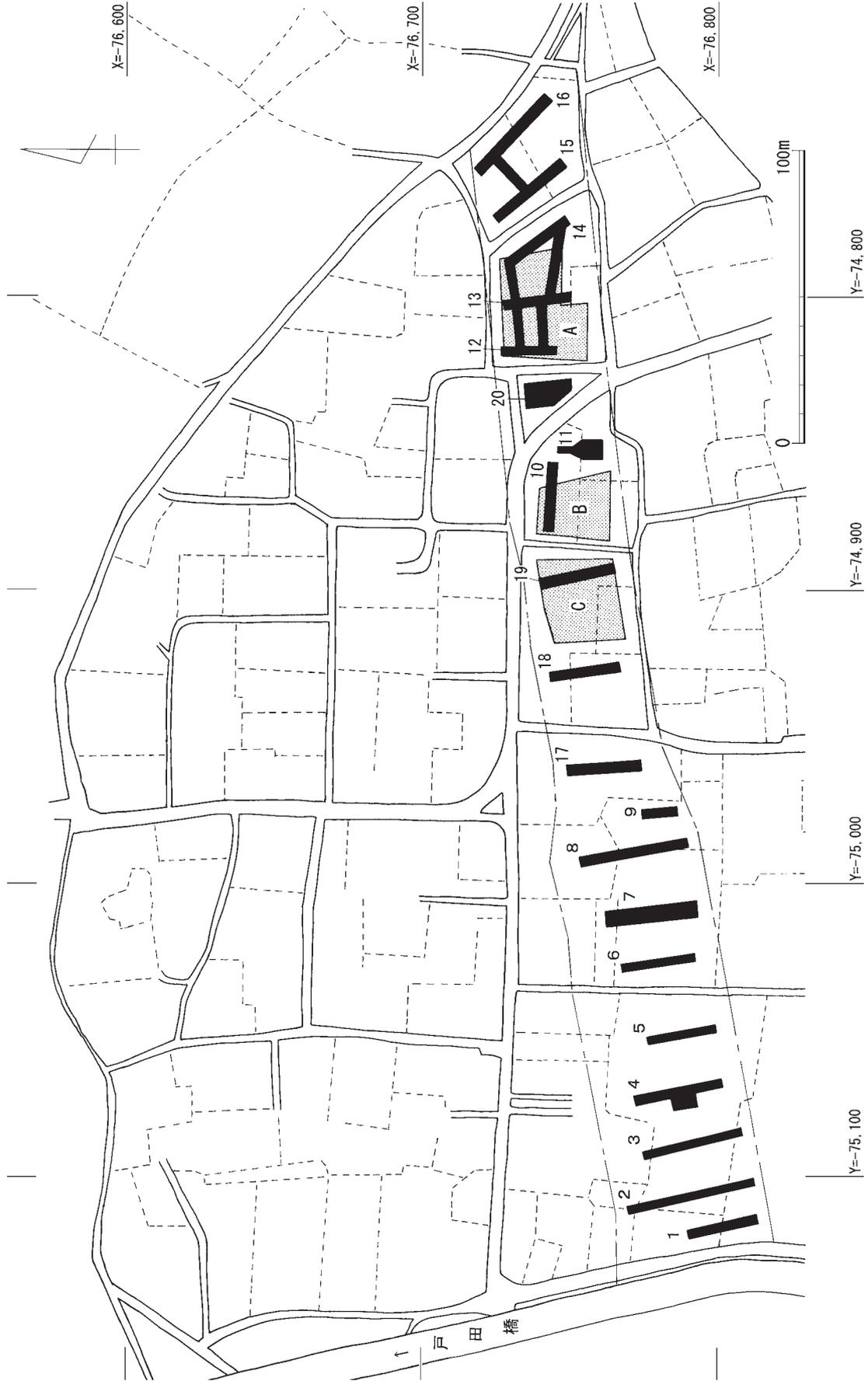
3. 調査経過

平成19年度の調査は、平成19年11月28日に対象地の西側部分から開始した。旧状は主に農地部分にあたる。標高は西から東に向かって徐々に高くなる。ここに、1～9トレンチを設定して調査を行った。3～9トレンチでは、地表下0.3～0.5mで中世の遺物を含む層がみられたので、4トレンチで若干の拡張を行った。その結果、耕作に伴うものとみられる南北および東西方向の素掘り溝やピットを検出した。出土遺物から、江戸時代前期頃の遺構と考えられる。下層は、砂質土の堆積が続き、地表下1.0～2.3mで河川堆積による礫層となる。この礫層には弥生時代から古代までの土器片が含まれる。

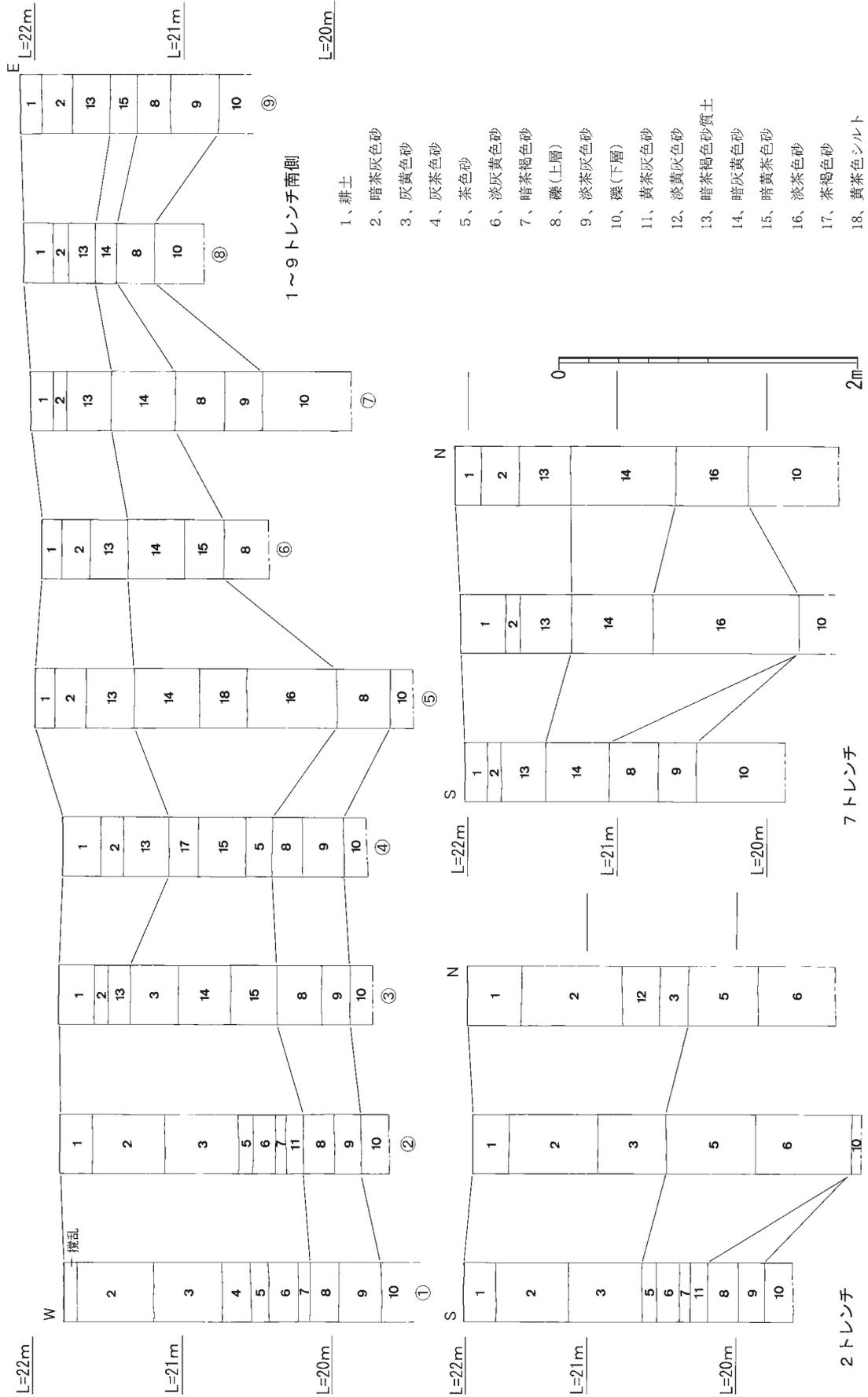
その後、対象地の中央部、東側部の調査を行った。中央部は民家の移転が未了だったため、東端部に10・11トレンチを設定した。10トレンチでは地表下0.7～0.8mで、溝・ピット等の遺構を検出した。出土した遺物から、中世頃の遺構と考えられる。東側部では、12～16トレンチを設定して、調査を行った。その結果、12～14トレンチで、13世紀頃の遺物を含む土坑やピットを確認した。15・16トレンチでは、近世の遺構を確認したが、それ以前の時期の遺構は無かった。平成19年度の調査終了は平成20年2月22日で、調査面積は1,780㎡である。

平成20年度調査は、平成20年4月23日から開始した。昨年度調査の12～14トレンチ部分をA地区、10トレンチ周辺をB地区として本調査を行うこととし、A地区から着手した。その後、昨年度試掘調査ができなかった箇所には17～19トレンチを設定して遺構・遺物の有無を確認した。

A地区調査と試掘調査の結果を受け、関係諸機関と協議を行い、溝等の遺構を検出した19トレンチ周辺をC地区として本調査を行うこととした。また、A地区についても調査範囲を拡張し、



第2図 調査区配置図



第3図 試掘トレンチ柱状断面図

その西側に隣接する部分も20トレンチを設定して調査を行うことになった。20トレンチでは土坑・ピット・石列などを検出した。土坑では、堆積土に焼土と炭化物塊・灰・鍛冶滓を含むものがあり、調査地付近で小鍛冶を行っていた可能性がある。また、堆積土中から鉄製紡錘車(第9図71)が出土した土坑もある。石列は、土坑の北および南側の肩部に礫を並べるもので、池と思われる。平成20年度の調査終了は10月22日で、調査面積は2,300㎡である。調査終了にあたって、9月23日に現地説明会を実施した。地元の方々を中心に131名の参加があった。

(引原茂治・柴 暁彦)

4. 調査の概要

調査地の層序は、A～Cの各地区とも0.6～1.0mの宅地造成土が堆積している。B地区は第7図の12層が遺構検出面となる。C地区は同20層上面が遺構検出面である。

①A地区 A地区で検出した遺構は掘立柱建物跡、多数のピット・土坑・溝などがある。検出した遺構の大半が中世のものである。中世の溝跡の方向は北東-南西方向を示しており、当時の地形(由良川の流路)に制約されたものと考えられる。

調査地西半部で検出した溝S D27および溝S D241の2条の溝は道路側溝とも考えられるが、方向をわずかに違える。溝心々の間隔は10mを測る。

溝S D04は北西-南東方向の溝である。溝の上面には拳大の礫が多数集積していた。この礫を除去するとその下の堆積土中で、ほぼ完形品の瓦器椀1点と別個体の瓦器椀片が出土した。この溝の時期は出土遺物から12世紀後半と考えられる。

土坑S K07は平面形が長楕円形をなす土坑で、長軸1.8m、短軸0.5m、深さ0.4mを測る。土坑内には拳大から人頭大の礫が20個程度投棄されていた。大半が5層中に含まれていた。礫の中には被熱により赤変しているものがみられた。土坑の中央部付近で土師器皿片、3層および5層から瓦器椀の破片が出土した。また土師器皿の近辺で銭貨1点が出土したが、劣化が激しく銭面の判読はできない。墓の可能性も考えられる。

石組溝S X08は、両肩部の石列で石の配列が異なる。残存する北側の石列は1石を除き、溝の内側に端面を揃えて11石が残存していた。一方、南側の石列は石の側面を揃えて、5石が残存していた。南北の石列の幅は0.3mを測る。溝は北東から南西に向かって下降する。

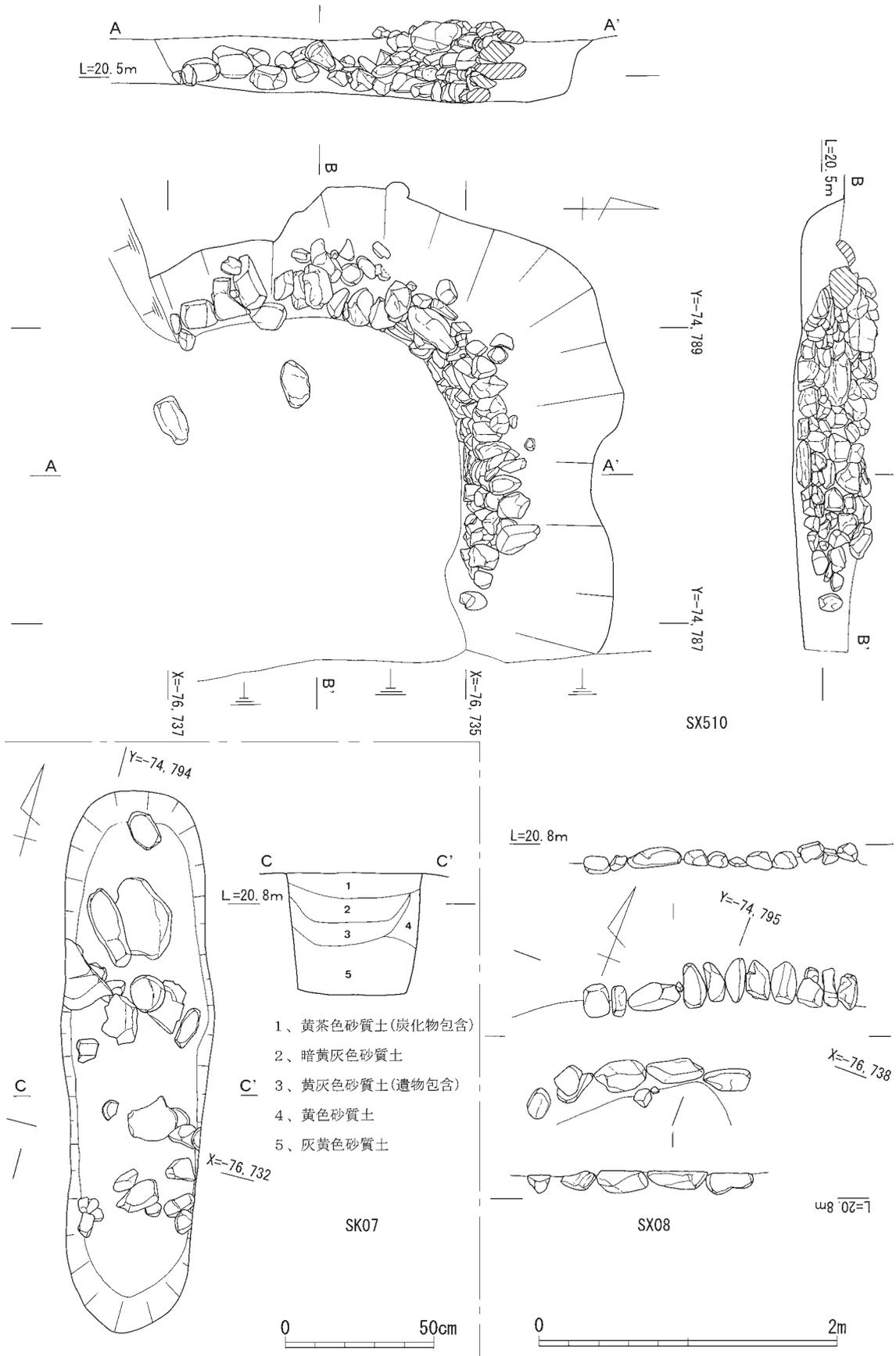
土坑S K09は長軸0.8m、短軸0.5mの規模で、平面形が楕円形をなす土坑である。深さは0.3mを測る。土坑内から完形品の瓦器椀・土師器皿などが出土した。

池状遺構S X510は推定する直径が内法で2.5mを測る半円形の遺構である。土坑の内面には、拳大から人頭大の礫が底面から4～5石積み上げられた状態で残存していた。石積みの高さは0.5mを測る。遺構の北側の石積みは良好に残っていたが、南東側の石積みは残存していなかった。その形状から池状の施設とも考えられるが、底部に粘土を貼ったような耐水構造は見られないことから、室状の施設ともみられる。

ピットは調査地の北東部および南西部を中心に直径0.3m程度のものが数百存在し、掘立柱建



第4図 A地区平面図



第5図 A地区検出遺構実測図

物跡がかなりの頻度で建て替えられていたと見られる。ピットの中には根石を持つものも見られることから、掘立柱建物跡として復元できるはずであるが、確実に一つの建物跡として認識できるものは少なく、その中で3棟を復原している。ピットは溝S D27を切っており、溝廃絶後に建物を建てたものとする。

近世の遺構は土坑、溝などがある。土坑S K03は廃棄土坑と考えられ、陶磁器や瓦等の遺物が出土した。時期は18世紀後半～19世紀である。

なお調査地の南東部は遺構が希薄であることや、池状遺構S X510の南東側の石積みも消失していることから、洪水で遺構が流出しその後に粘質土が堆積したものと考えられる。

②B地区 中世の遺構として、掘立柱建物跡・溝・土坑などがある。調査地北側で2間×3間(4.2×5.4m)の東西棟の建物跡を検出した。

調査地中央部で検出した溝S D22は幅4.5m、深さ0.3mを測る、東西方向の溝である。調査地内で長さ12mを検出した。溝幅は西側に向かって広がる。堆積土中には若干の人頭大の礫を含み、底部付近で完形品の瓦器椀・瓦器皿・土師器皿や、瓦質土器の鍋・体部外面にタタキを施した東播系の甕・青白磁小壺片などがまとまって出土した。

溝S D13および溝S D130は平行する東西方向の溝である。溝幅は1.2～1.3mを測る。これらの溝心々の間隔は6mである。そのほか溝S D22を切るように溝S D08、溝S D10の南北方向で2条の平行する溝がある。溝は現里道に平行し、里道から東へ10mの位置にあるため、何らかの区画を示しているものと思われる。また溝S D14は西壁寄りで検出したが、対応する西側の溝の肩部分は調査地外のため、規模は不明である。この遺構から13世紀頃の中国製青磁椀などが出土した。ほかに、11世紀後半と考えられる底部糸切の須恵器椀なども含まれる。

③C地区 B、C地区間の南北方向の里道をはさんで西側は畑地として利用がなされており、東西方向に20条ほど平行して並ぶ畝溝群を確認した。畑の区画は北東—南西方向の傾きを持つ。畝溝群は幅10m、長さ17m分を調査地内で確認した。B地区にはこの畝溝群が確認できないことから、中世段階においてもここに位置した里道が土地の境界となっていたと考えられる。一方、畑地の西側はピットが散発的に見られたが、当時は空閑地になっていたと思われる。

(柴 暁彦)

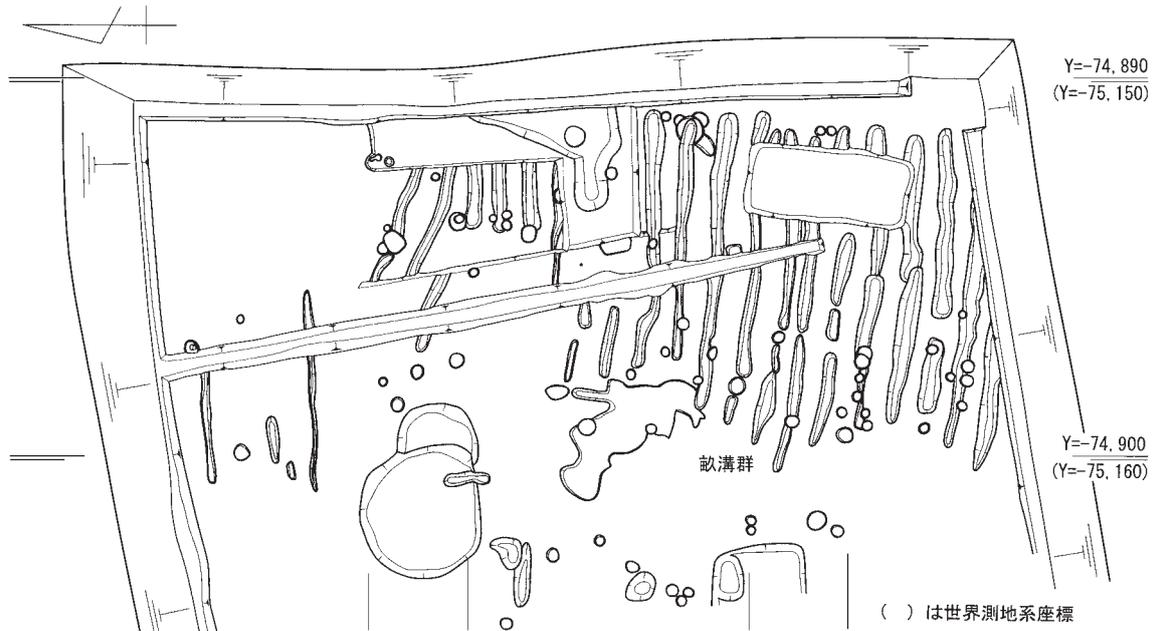
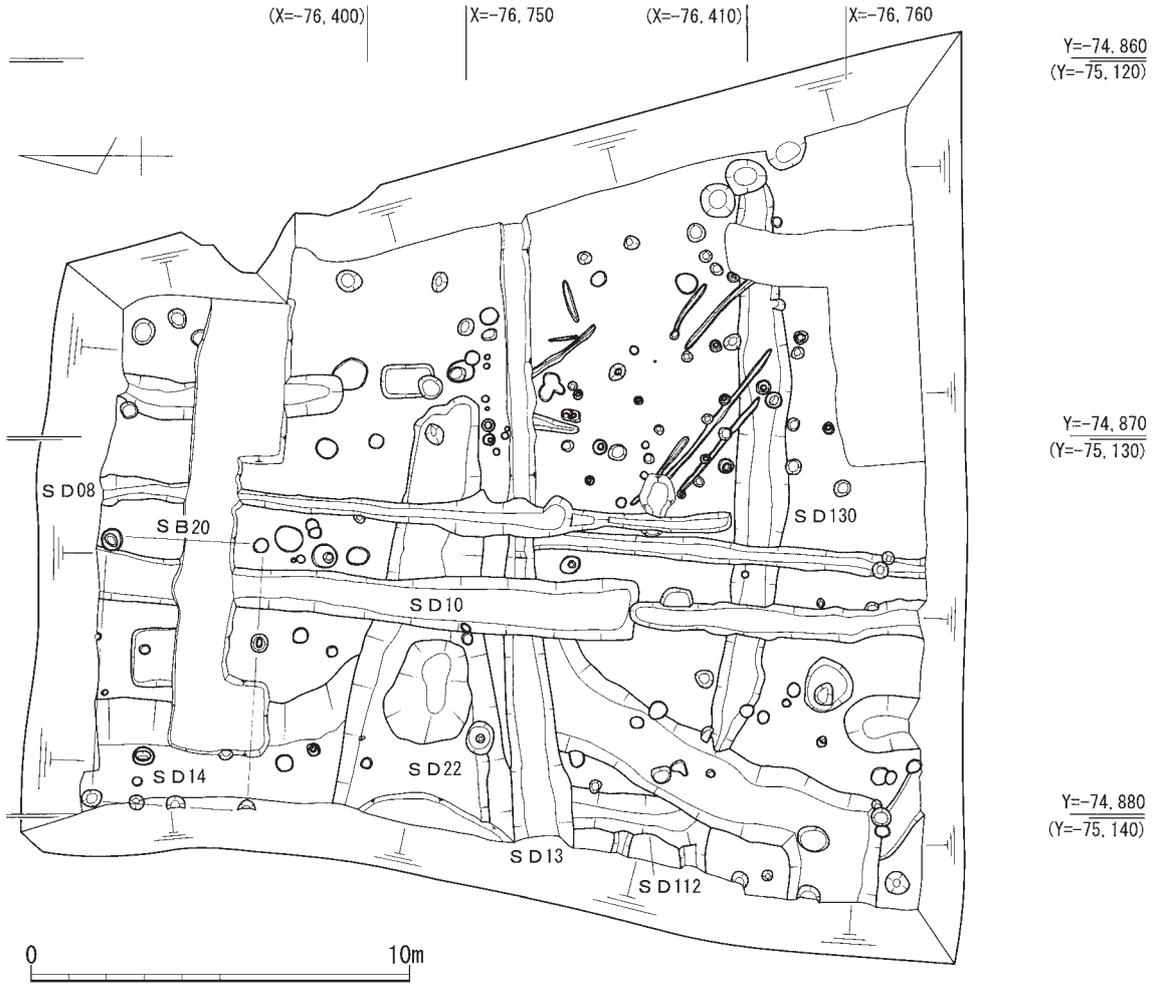
5. 出土遺物

今回の調査では、多くの遺物が出土した。中世以降の遺物がほとんどで、古代以前に遡る時期の遺物は少ない。

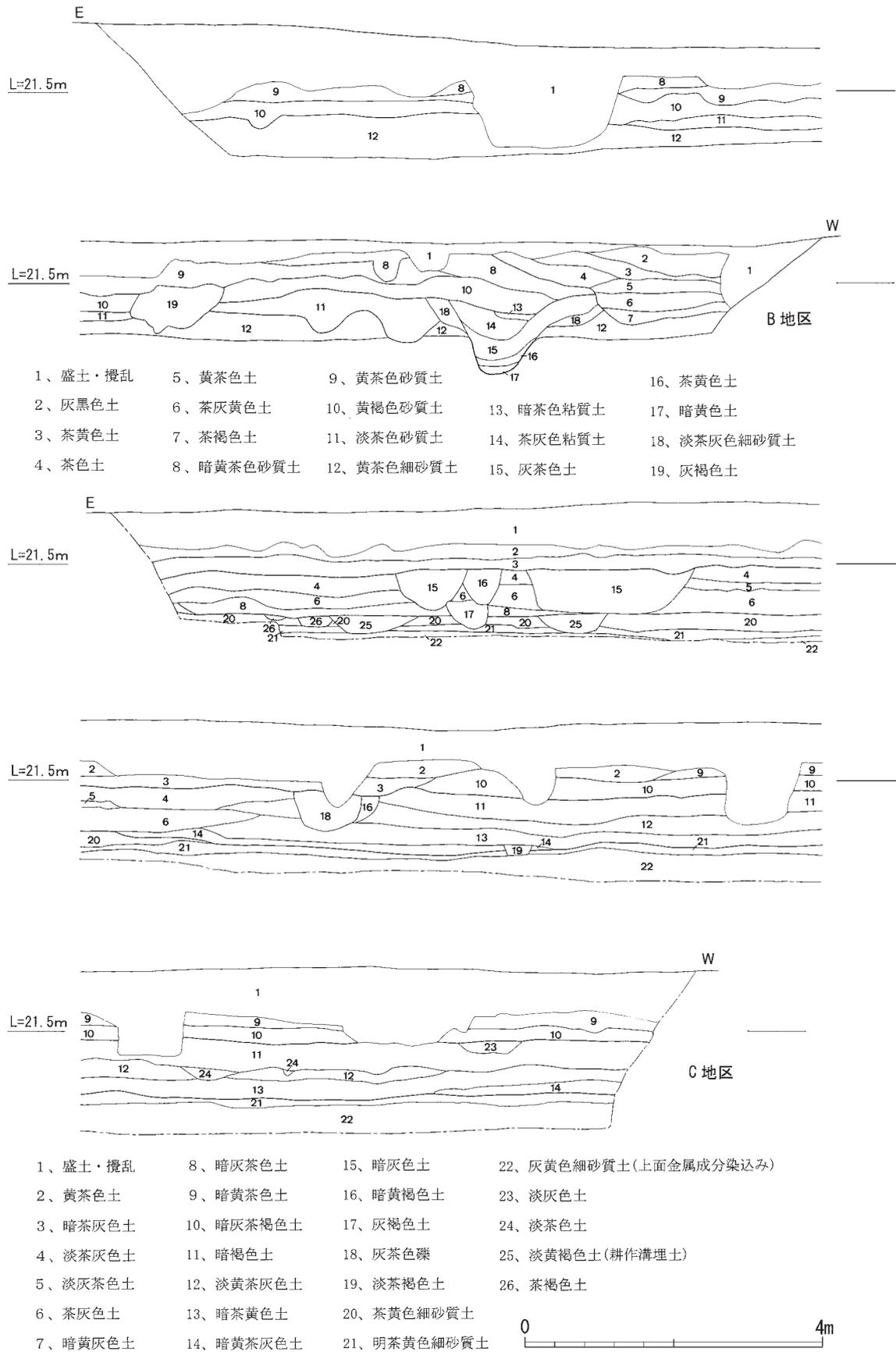
①試掘トレンチ出土遺物

試掘調査では、西半部の1～9トレンチでは、顕著な遺構を検出しなかった。出土遺物もわずかで、河川堆積と見られる礫層から出土した土器はローリングを受けているものが多い。本調査を行った東半部では、様々な遺物が出土している。

1は土師器甕の口縁部で、内湾気味に立ち上がる。2・3は土師器甕で、体部から口縁部が丸



第6図 B地区・C地区平面図



第7図 B地区・C地区南壁断面図

味をもって屈曲する。口縁端部は丸く終わる。ほぼ全面的にナデ調整である。4・5は土師器碗で、ロクロ成形、底部糸切りである。以上の遺物は、10トレンチ出土である。

6は弥生土器把手付鉢で、体部外面に環状の把手を付す。胎土は精良である。11トレンチから出土した。後期の土器とみられる。7は弥生土器壺で、口縁端部が斜め下に垂下する。端面に凹線文を施す。頸部外面にも凹線文をめぐらせる。畿内第Ⅳ様式期の土器とみられる。12トレンチから出土した。

8・9は土師器皿で、底部から口縁部が丸味をもって立ち上がる。13世紀頃のものか。10・11・12は瓦器碗で、口縁部が肥厚する、いわゆる丹波型の碗である。内面のミガキはやまばらであり、外面にはミガキがほとんど見られない。13世紀頃のものともみられる。13は瓦器碗の底部で、高台内にヘラ記号と考えられる線刻がある。11・12と同時期とみられる。14・15は中国製青磁碗の底部で、龍泉窯産と考えられる。14は外面に蓮弁文を刻む。16は弥生土器甕の口縁部で、口縁部が2段状になり、外面に擬凹線文をめぐらせる。後期後半に位置付けられる。17は土錘である。以上の遺物は、13トレンチから出土した。

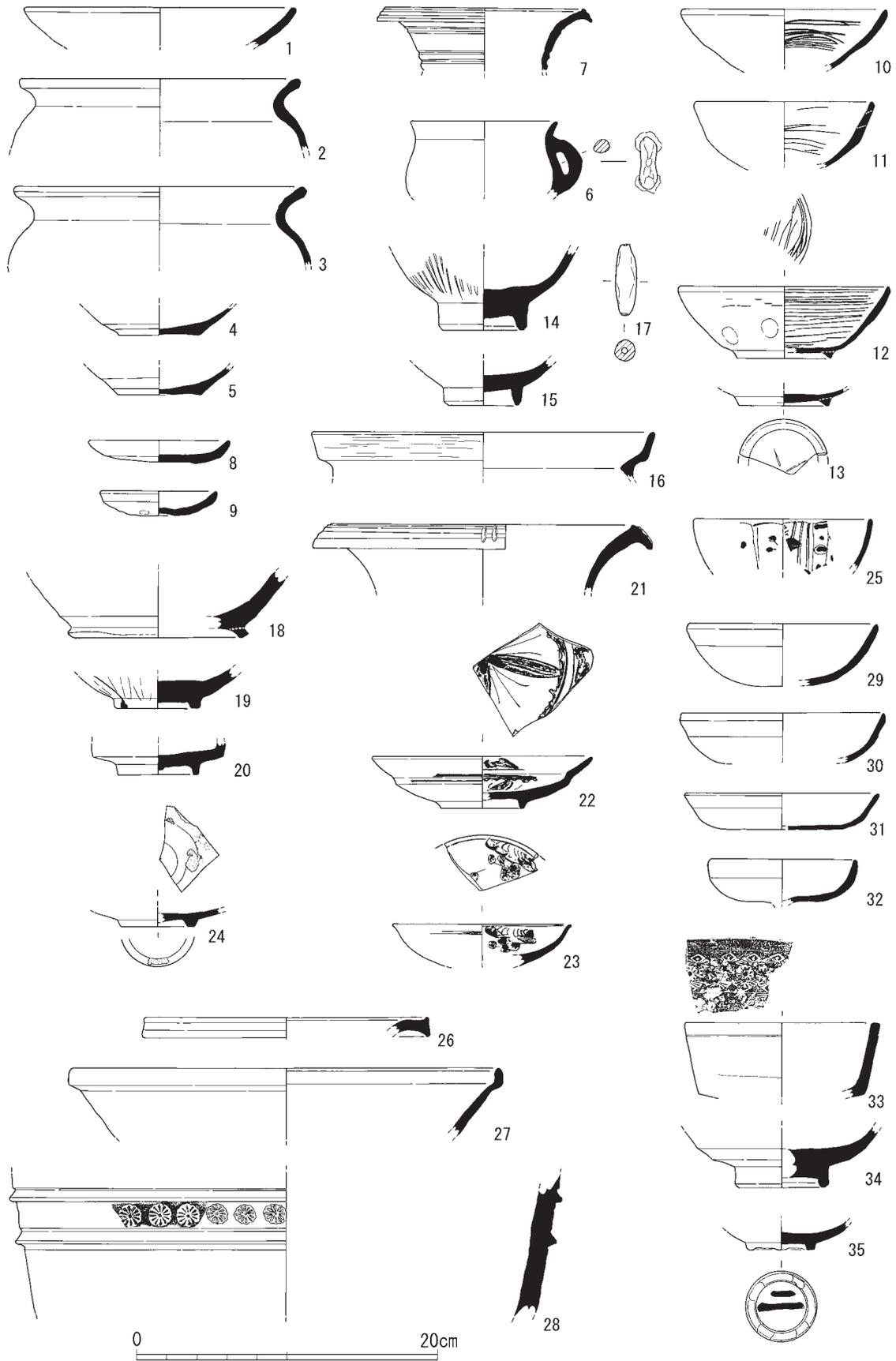
18は須恵質鉢の底部である。貼付け高台を付す。在地系の土器か。19は中国製白磁碗の底部である。玉縁状の口縁をもつ12世紀頃の製品と考えられる。20は肥前陶器の筒状の碗底部とみられる。高台置付以外に暗緑褐色釉を施す。17世紀頃の製品と考えられる。23は肥前磁器染付皿である。やや深みをもつ。内面に花文を描く。17世紀前半頃の製品とみられる。以上の遺物は、13・14トレンチ間北側トレンチから出土した。

21は弥生土器壺の口縁部で、端部が斜め下方に垂下する。端面に凹線文を廻らし、棒状浮文を付す。畿内第Ⅳ様式期の土器とみられる。22は肥前磁器の染付皿である。形状は段皿状である。見込みに銀杏文を描く。17世紀前半頃の製品で、いわゆる初期伊万里である。24は肥前陶器の皿である。銅緑釉を施す。見込みは、釉を蛇の目状に掻きとり、その部分に砂目痕がある。17世紀後半頃の製品とみられる。以上の遺物は、13・14トレンチ間南側トレンチから出土した。

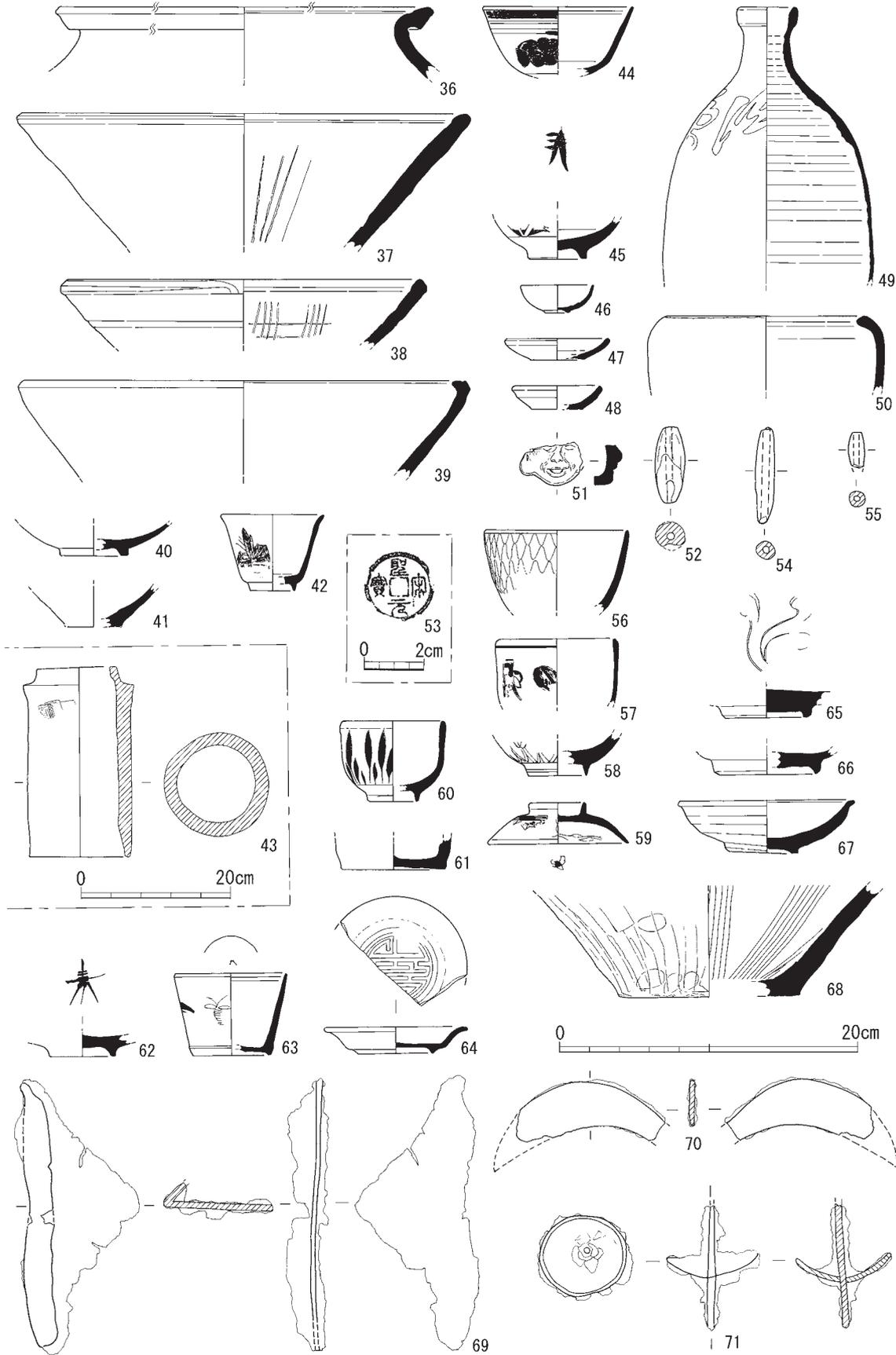
25は中国製の青花磁器鉢である。口縁端部が輪花状を呈する小型の鉢である。いわゆる「芙蓉手」と呼ばれるものである。17世紀前半頃ののものであろう。15トレンチから出土した。

26は弥生土器壺の口縁部である。口縁端部をわずかに上下に拡張する。端面には凹線文をめぐらせる。27は須恵質の鉢で、東播磨系の製品である。13世紀頃のものか。28は瓦質火舎の胴部とみられる。2条の貼付突帯の間に菊花文を押印施文する。29は土師器杯もしくは深目の皿とみられる。内外面ナデ調整である。30～32は土師器皿である。内外面ナデ調整である。33は土師質の香炉である。外面に菊花文、花菱文を押印施文する。34は中国製青磁碗の底部で、龍泉窯産と考えられる。35は中国製白磁皿の底部である。高台置付を4か所、浅く割り込む。高台内に「二」の墨書が見られる。以上の遺物は、15・16トレンチ間トレンチから出土した。

36は丹波焼甕の口縁部とみられる。算盤玉形の胴部をもつものと考えられる。14世紀頃の製品か。37は丹波焼の播鉢である。播り目は一本引きである。16世紀頃の製品とみられる。38は丹波焼播鉢で、播り目は4本を単位とする櫛引きである。17世紀頃の製品とみられる。39は丹波焼の



第8図 出土遺物実測図1 (試掘トレンチ)



第9図 出土遺物実測図2(試掘トレンチ)

鉢である。内面のみ施釉する。40は肥前陶器の皿で、内面に銅緑釉を施釉する。見込みの釉を蛇の目状に掻き取る。41は肥前陶器の椀である。高台は碁笥底状である。42は中国製青花磁器の小杯で、口縁端部が外反する。43は瓦質の土管である。以上の遺物は、16トレンチから出土した。

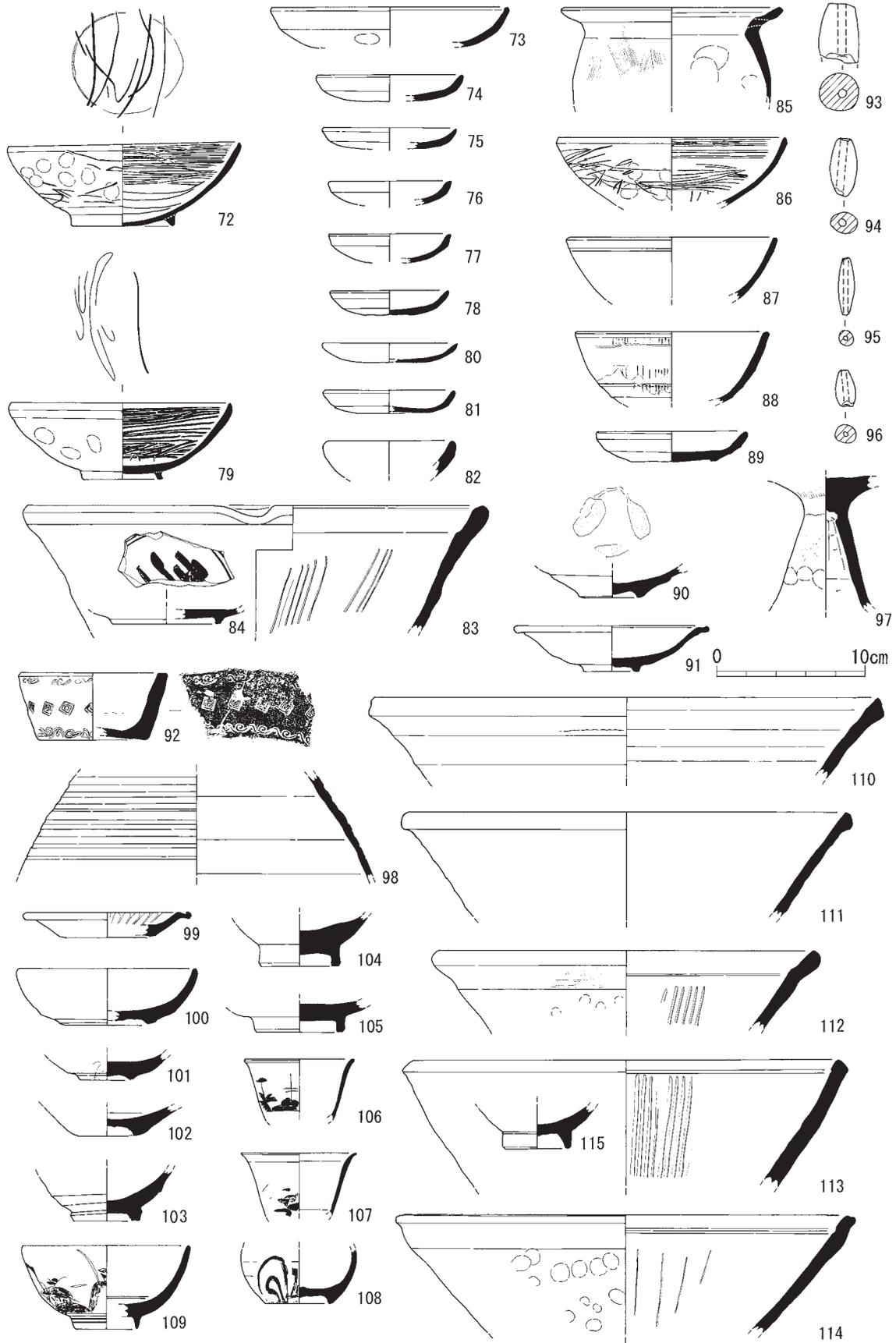
44は染付磁器椀で、口縁端部がやや外反気味になる。45は染付磁器椀の底部で、見込みにハリ痕が見られる。46は白磁の小椀で、国産とみられる。47・48は土師器皿で、ロクロ成形、底部糸切である。49は丹波焼の徳利で、肩部に筒描きで文字を書く。50は陶器の甕で、蓋付であったものとみられる。51は伏見人形の顔面部分である。大黒天像か。52は土錘である。53は北宋銭の「聖宋元寶」で、1101年初鑄である。以上の遺物は、18トレンチから出土した。54は細長い形状の土錘で、19トレンチから出土した。

55は小型の土錘である。56は肥前磁器染付椀で、一本描きの網目文を描く。17世紀の製品か。57も肥前磁器染付椀で、17世紀の製品とみられる。58は肥前磁器染付椀の底部で、二本描きの網目文を描く。59は染付磁器蓋で、端反(はざり)椀の蓋とみられる。60は染付磁器椀で、器胎は厚目である。61は丹波焼徳利底部で、焼成堅緻である。62は染付磁器椀底部で、見込みにハリ痕がある。63は肥前染付磁器向付で、いわゆる「蕎麦猪口」である。64は国産白磁皿である。58～64は18世紀後半頃以降の製品とみられる。65は中国製青磁椀底部、66は中国製青磁皿底部とみられる。67は肥前陶器皿で、17世紀初頭頃の製品か。68は瓦質播鉢の底部である。以上の遺物は、20トレンチから出土した。

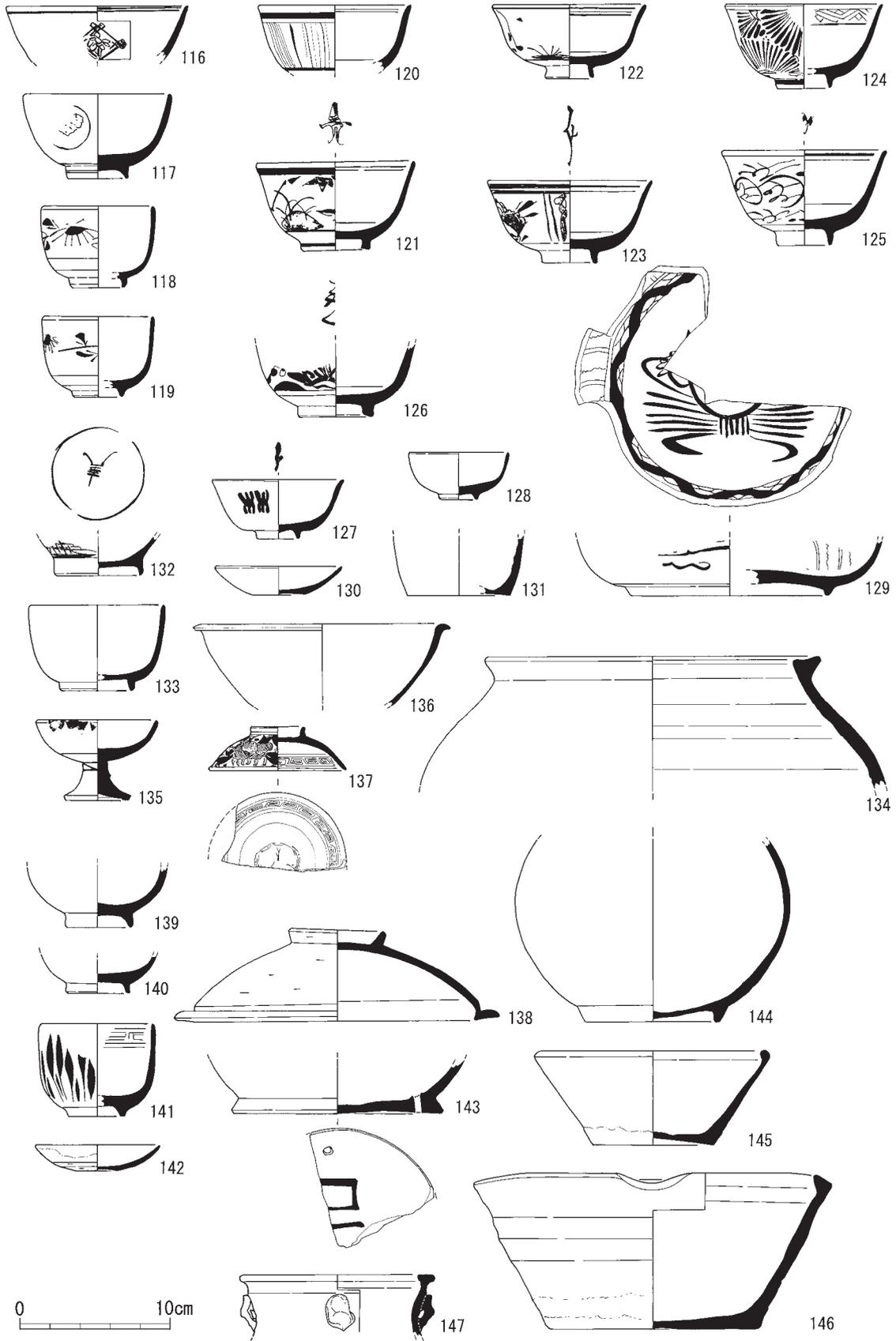
②A地区出土遺物

72は瓦器椀で、内面には密なミガキ、外面には疎なミガキが施される。見込みに重ね焼の痕跡が残る。73は土師器皿で、端部がわずかに玉縁状になる。74～78は土師器皿で、口径9cm前後を測る。以上の遺物は、12世紀末から13世紀にかけてのころのものとみられ、土坑SK09から出土した。79は瓦器椀で、内面のミガキは密である。12世紀後半頃のものとみられる。溝SD04から出土した。80～82は土師器皿で、82は厚手である。80は溝SD33、81は土壙SK07、82はピットSP40出土である。83は瓦質播鉢で、口縁端部が屈曲して外反し、やや受け口状になる。SX06出土である。84は中国製青花磁器皿で、見込みに「寿」字文を描く。溝SD05出土である。85は土師器甕で、外面ハケ目調整である。溝SD50から出土した。86は瓦器椀で、72に類似する。ピットSP325から出土した。

87は中国製青磁椀で、口縁端部外面に沈線がめぐる。88は瀬戸美濃系の丸椀で、外面に間垣状の沈線文がめぐる。この2点は、石組溝SX08から出土した。89は美濃窯産の丸皿で、見込みは無釉である。16世紀の製品である。ピットSP43から出土した。90は肥前陶器の皿である。見込みに砂目の目跡がある。17世紀前半頃の製品である。土坑SK512出土である。91は肥前陶器の皿で、口縁部が屈曲する。いわゆる「折縁皿」である。見込みに砂目の目跡が残る。17世紀前半頃の製品か。ピットSP60から出土した。92は瓦質香炉である。外面には、上下端に波形文、中央に雷文を押印施文する。ピットSP57出土である。93～96は土錘である。93はピットSP12出土で、その他は包含層出土である。



第10図 出土遺物実測図3 (A地区)



第11図 出土遺物実測図4 (A地区)

97は土師器高杯の脚部である。98は焼締陶器壺で、東南アジアの製品と考えられる。外面は赤褐色を呈し、内面は白灰色地に暗褐色の金属成分が滲出する。99は美濃窯産の菊皿で、16世紀の製品か。100～103・115は肥前陶器である。16世紀末頃から17世紀にかけての製品である。104は中国製青磁椀、105は中国製青磁皿である。106・107は中国製青花磁器小杯である。薄手で、口縁端部が外反する。108は肥前磁器染付小瓶である。簡略な草花文を描き、高台には砂粒が付着する。17世紀前半頃の製品で、いわゆる初期伊万里である。109は肥前磁器染付椀で、いわゆる「くらわんか」である。18世紀の製品である。110・111は東播系の須恵質鉢で、13世紀頃の製品か。112は瓦質播鉢で、口縁部が屈曲して外反する。113は備前焼播鉢で、14世紀頃の製品か。114は丹波焼播鉢で、播目は一本引きである。16世紀の製品とみられる。以上の遺物は、包含層出土である。

116・117は肥前磁器染付椀で、コンニャク印判で施文する。18世紀の製品で、117はいわゆる「くらわんか」である。118・119は染付磁器椀で、胴部がほぼ直線的に立ち上がる。120～125は染付磁器椀で、口縁部が外反気味になる端反椀である。126も同様の椀とみられる。127は染付磁器椀で、端反の小椀である。瀬戸産の可能性もある。128は白磁小椀である。129は染付磁器鉢である。高台内は無釉である。130は陶器質の灯明皿である。131は丹波焼徳利で、焼成は堅緻である。118～131は18世紀末～19世紀頃の遺物である。以上の遺物は、土坑S K03から出土した。

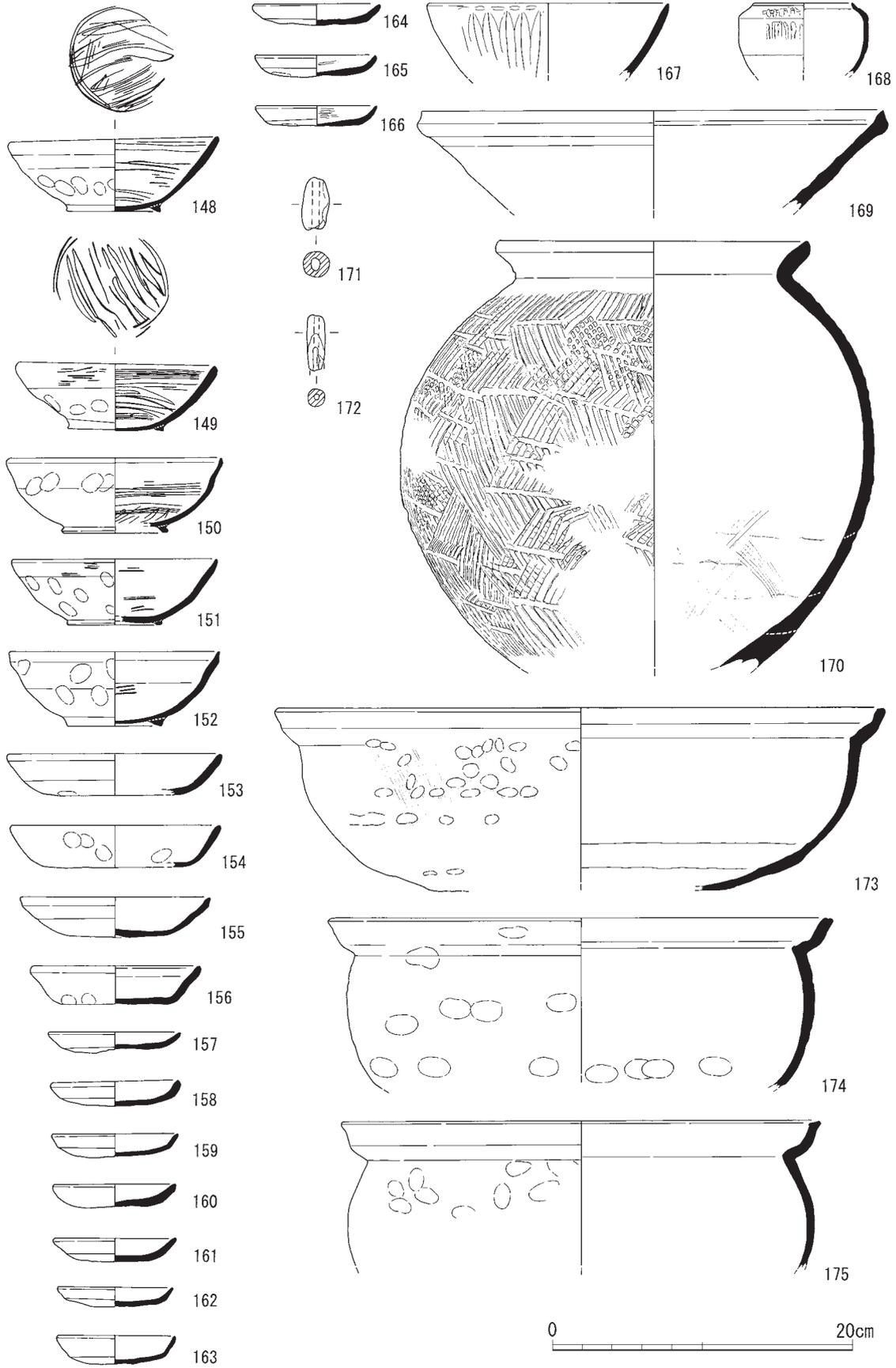
133は陶器椀で、京焼系とみられる。134は丹波焼甕である。これら2点は、溝S D05から出土した。135は染付磁器仏飯器で、肥前産とみられる。外面に雨降文を描く。土坑S K512出土である。136は陶器鉢で、丹波産とみられる。137は染付磁器蓋で、端反椀の蓋である。これら2点は、土坑S K54出土である。

132は染付磁器椀で、高台が高く、いわゆる「広東椀」である。138は陶器蓋で、把手付土鍋の蓋である。139は肥前陶器椀で、17世紀後半の製品である。140は陶器椀で、京焼系か。141は染付磁器椀で、胴部がほぼ直線的に立ち上がる。142は陶器質の灯明皿である。143は陶器の鉢状の器であるが、底部を穿孔する。底面に墨書がある。144は国産白磁瓶で、肥前産とみられる。145・146は丹波焼片口鉢である。147は丹波焼香炉もしくは火入れである。17世紀の製品である。

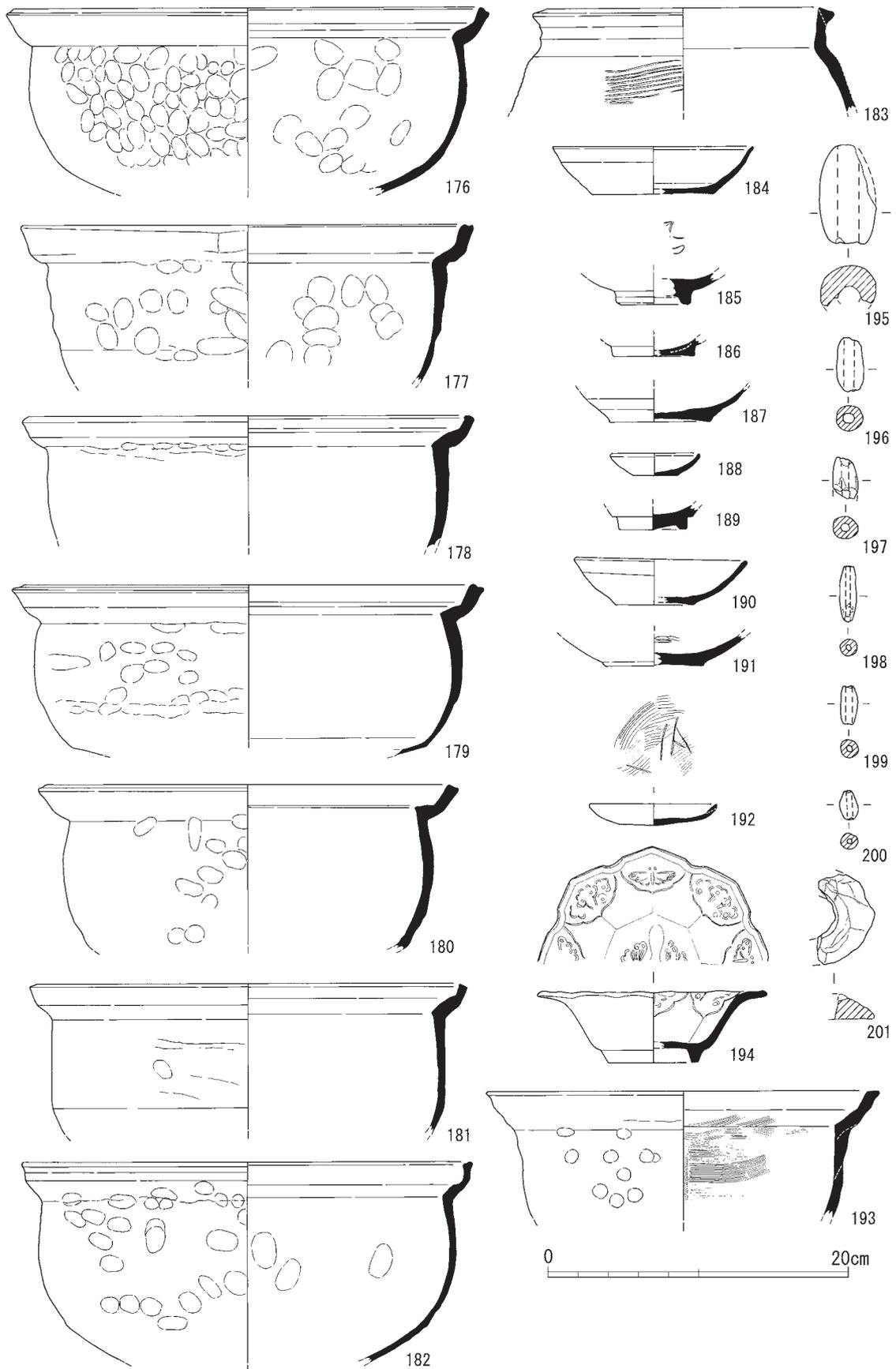
A地区では鉄製品も出土している。69は鋤先もしくは鍬先の一部とみられる。土坑S K03から出土した。70はやや小振りの鎌とみられる。包含層出土である。

③B・C地区出土遺物

B地区では、溝S D22から中世の遺物がまとまって出土しているのが注目される。148・149は瓦器椀で、高台径が大きく、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が肥厚し、いわゆる丹波型の特徴をもつ。内面のミガキはやや疎で、外面にはほとんどミガキがみられない。150～152も瓦器椀である。体部が丸味をもって立ち上がるが、高台径は大きい。ミガキはやや疎である。153～163は土師器皿である。153～155は口径13～14cmの大型、157～163は口径9cm前後の小型、156は口径がほぼ11cmの中型である。164～166は瓦器皿で、口径は土師器皿の小型に近い。167は中国製青磁椀で、外面にやや細手の蓮弁文を刻む。龍泉窯産とみられる。168は中国製青白磁



第12図 出土遺物実測図5 (B地区SD22)



第13図 出土遺物実測図6 (B・C地区)

小壺で、外面下半は無釉である。169は東播系の須恵質鉢である。170は瓦質もしくは土師質の甕で、胴部に綾杉状のタタキ目がある。播磨から北丹波の地域に分布している。171・172は土錘である。173～182は瓦質鍋である。体部は丸味をもち、口縁部は屈曲して受け口状になる。これらの遺物は、13世紀頃のものとみられる。

183は土師器鍋で、外面にタタキ目が残る。溝S D08出土である。184は須恵器杯で、底部糸切である。185は中国製青磁椀で、龍泉窯産と見られる。これら2点は、溝S D14出土である。186は土師器椀で糸切高台をもつ。187は須恵器杯で、底部糸切である。188は土師器皿で底部糸切である。これら3点は、溝S D112出土である。

189は美濃窯産の天目椀、190は底部糸切の土師器椀、191は黒色土器椀、192は瓦器皿、193は土師器鍋である。包含層出土である。195～200は土錘である。201は不明滑石製品である。

C地区では畝溝群などから遺物が出土しているが、細片が多い。194は国産青磁鉢で、型成形で、蝶文や靈芝文を浮彫する。三田青磁とみられる。幕末頃の製品か。近代井戸に切られた長方形土坑から出土した。(引原茂治)

6. まとめ

今回の調査では、「戸田」の集落の始まりが12世紀後半頃であることが確認できた。これは、この地域の歴史を考える上で重要な成果と言えよう。

戸田遺跡の周辺地域は、古代の雀部郷ささいべに属しており、寛治5年(1091)に丹波兼定により京都松尾社に寄進され、養和元年(1181)頃までには松尾社領の莊園雀部庄として立荘されていた。松尾大社文書のうち、鎌倉時代から室町時代にかけての雀部庄関係の文書に「富田」「とた」の記載があり、これが今の戸田に比定されている。以上のようなことから、戸田の集落の始まりは松尾社領雀部庄立荘の頃と考えられる。今回は、その頃の戸田集落の一部を確認したと言えよう。

出土遺物では、中国製青磁・白磁・青白磁のほかに、東南アジア産の甕とみられる焼締陶器片の出土が目される。また、国産陶磁器でも中世から近世にかけての各時期の製品が含まれている。戸田の集落は、由良川沿いに営まれている。かつて由良川では、さらに上流の綾部市域まで船が往来していたという。このような多種多様な土器・陶磁器類などからみて、中世から近世にかけての戸田は、由良川の水運を利用した交易活動などによって繁栄した豊かな村であったとみられることもできる。(引原茂治)

注1 調査参加者 真下春美 小島健之介 中島恵美子 川村真由美 村岡弥生

参考文献

「京都府の地名」(『日本歴史地名大系』第二六巻 平凡社)1981

福知山市史編さん委員会『福知山市史』史料編三 1990

「戸田・興地区発掘調査概要」(『福知山市文化財調査報告書』第46集 福知山市教育委員会)2004

圖 版



(1) 調査前全景 (西から)



(2) A地区調査前全景 (北東から)



(3) B地区調査前全景 (東から)



(1) 調査前全景 (北西から)



(2) 調査地全景 (空撮・南から)



(1) 調査地遠景 (空撮・東から)



(2) 調査地遠景 (空撮・西から)



(1) A地区全景（空撮・上が北）



(2) B・C地区全景（空撮・上が北）



(1) A地区全景（南西から）



(2) A地区土坑 SK07（南から）



(3) A地区石組溝 SX08（南東から）



(1) A 地区池状遺構 SX510
(南東から)



(2) A 地区池状遺構 SX510
(南西から)



(3) A 地区池状遺構 SX510 部分
(南東から)



(1) B地区全景（西から）



(2) B地区溝 SD22 遺物出土状況（西から）



(1) B 地区全景 (南東から)



(2) B 地区溝 SD22 遺物出土状況 (南東から)



(3) C 地区溝群 (北東から)



(1) 2トレンチ全景 (南から)



(2) 2トレンチ断割り断面
(南東から)



(3) 4トレンチ拡張部分 (南から)



(1) 7 トレンチ全景 (南から)



(2) 11 トレンチ全景 (北から)



(3) 15 トレンチ全景 (北西から)



(1)16 トレンチ南半部 (北西から)



(2)17 トレンチ全景 (北から)

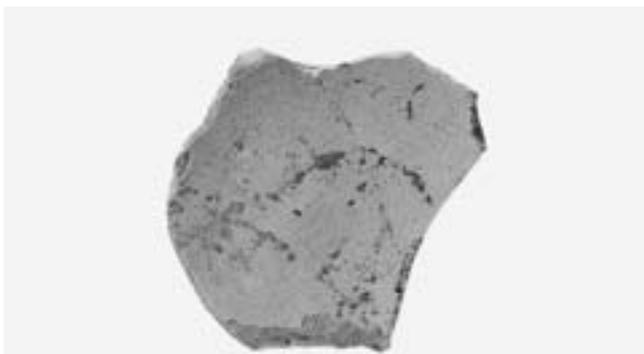


(3)20 トレンチ検出石組遺構
(東から)





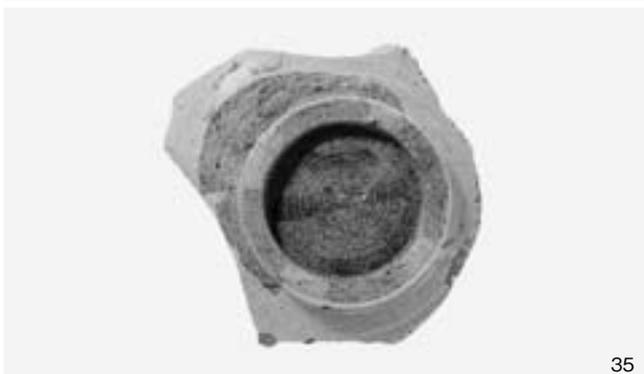
169



35



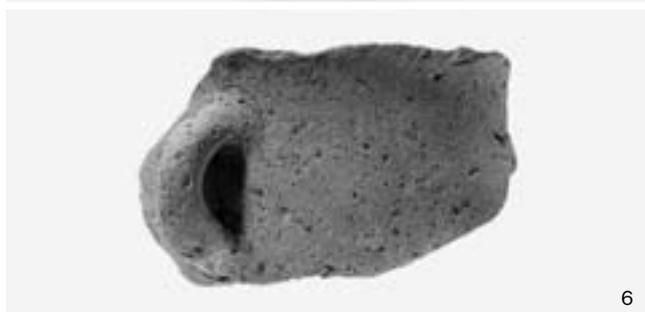
191



35



189



6



98



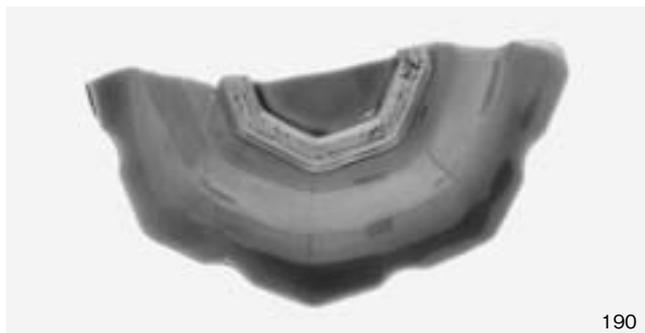
54



190



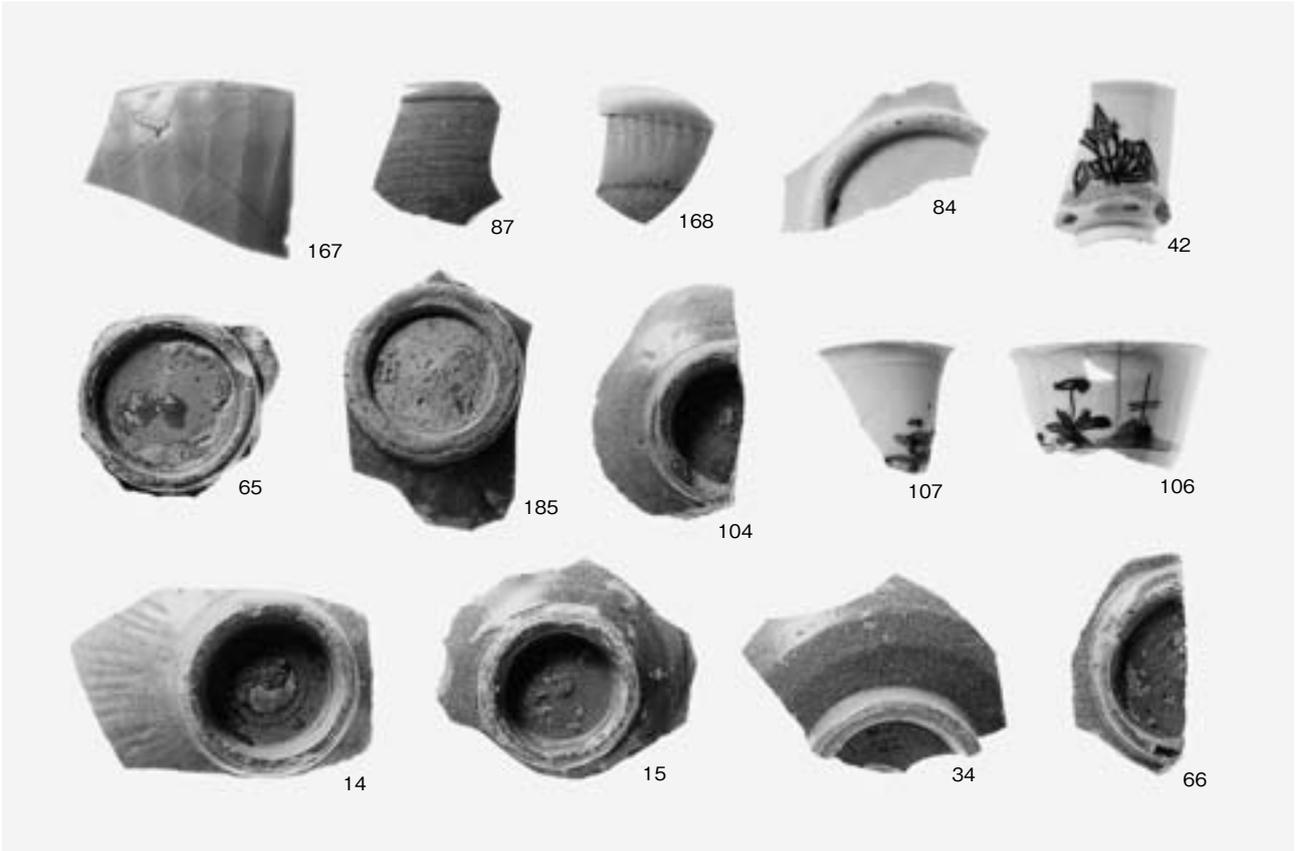
98



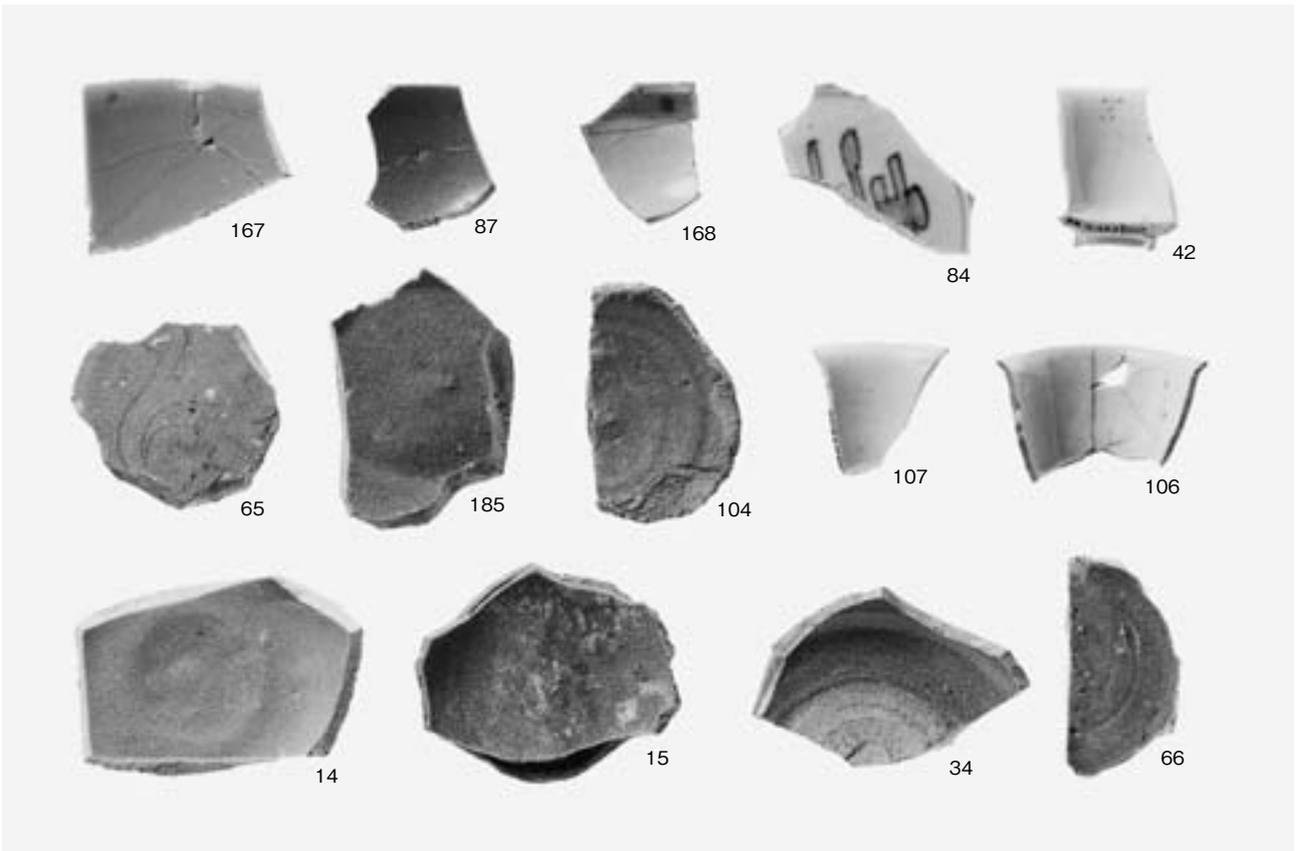
190



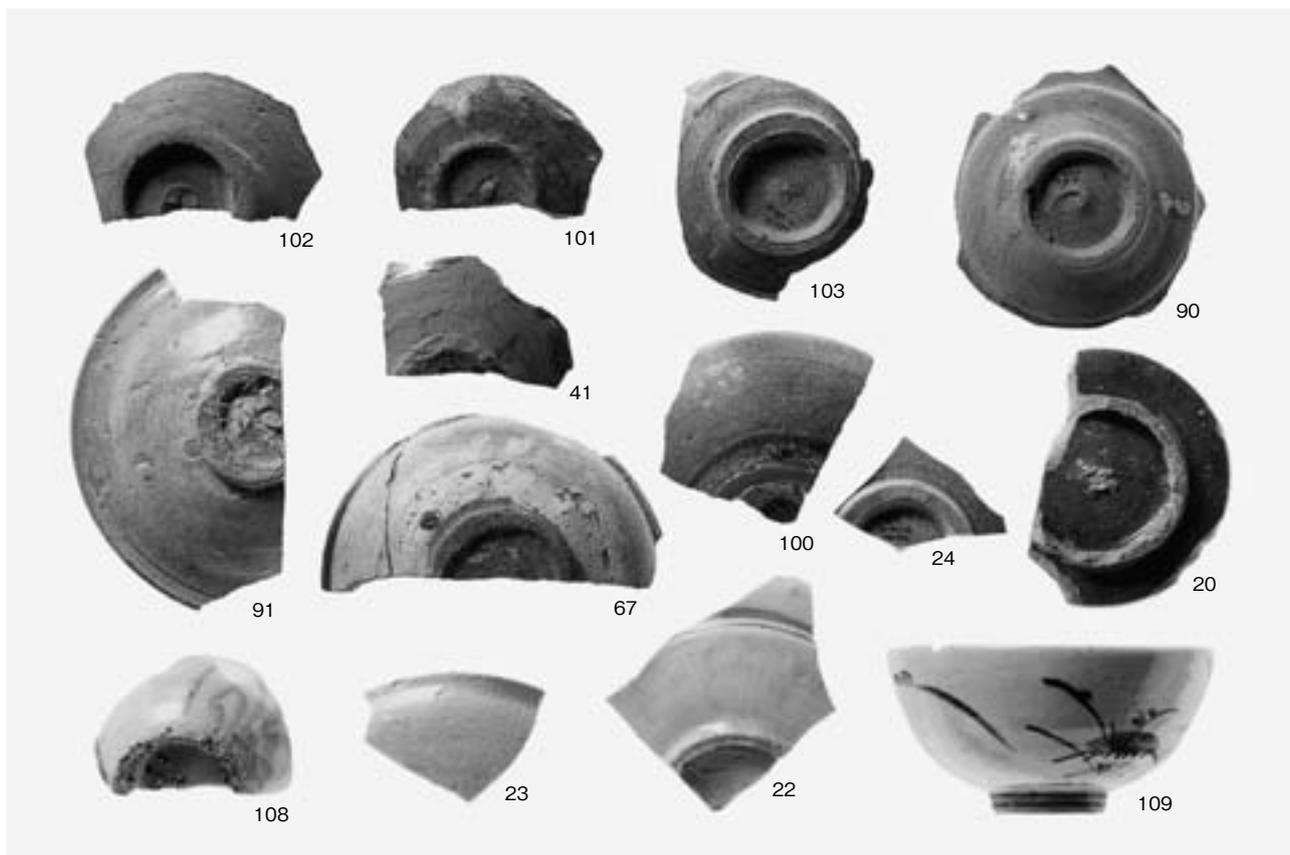
135



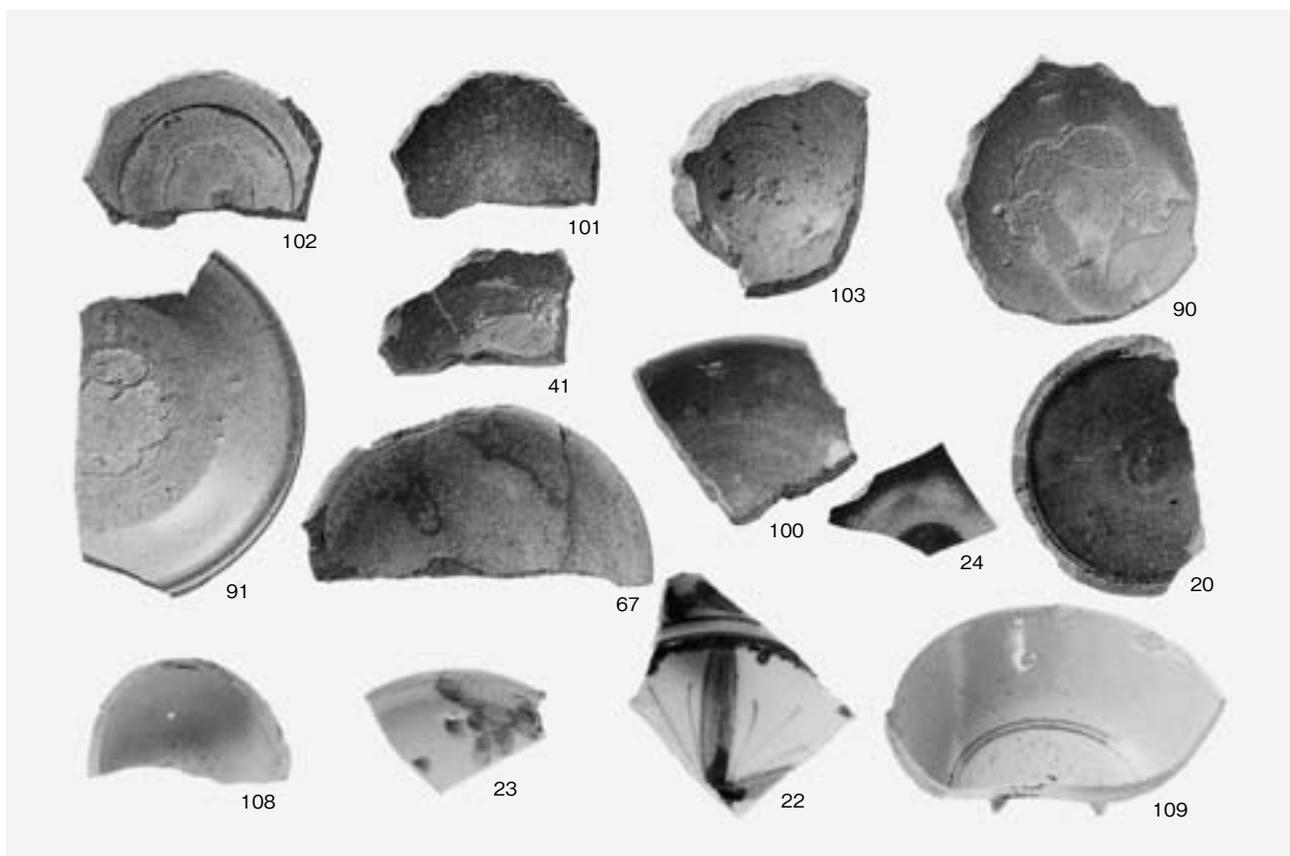
(1) 出土遺物 (3) 中国製陶磁器、外面



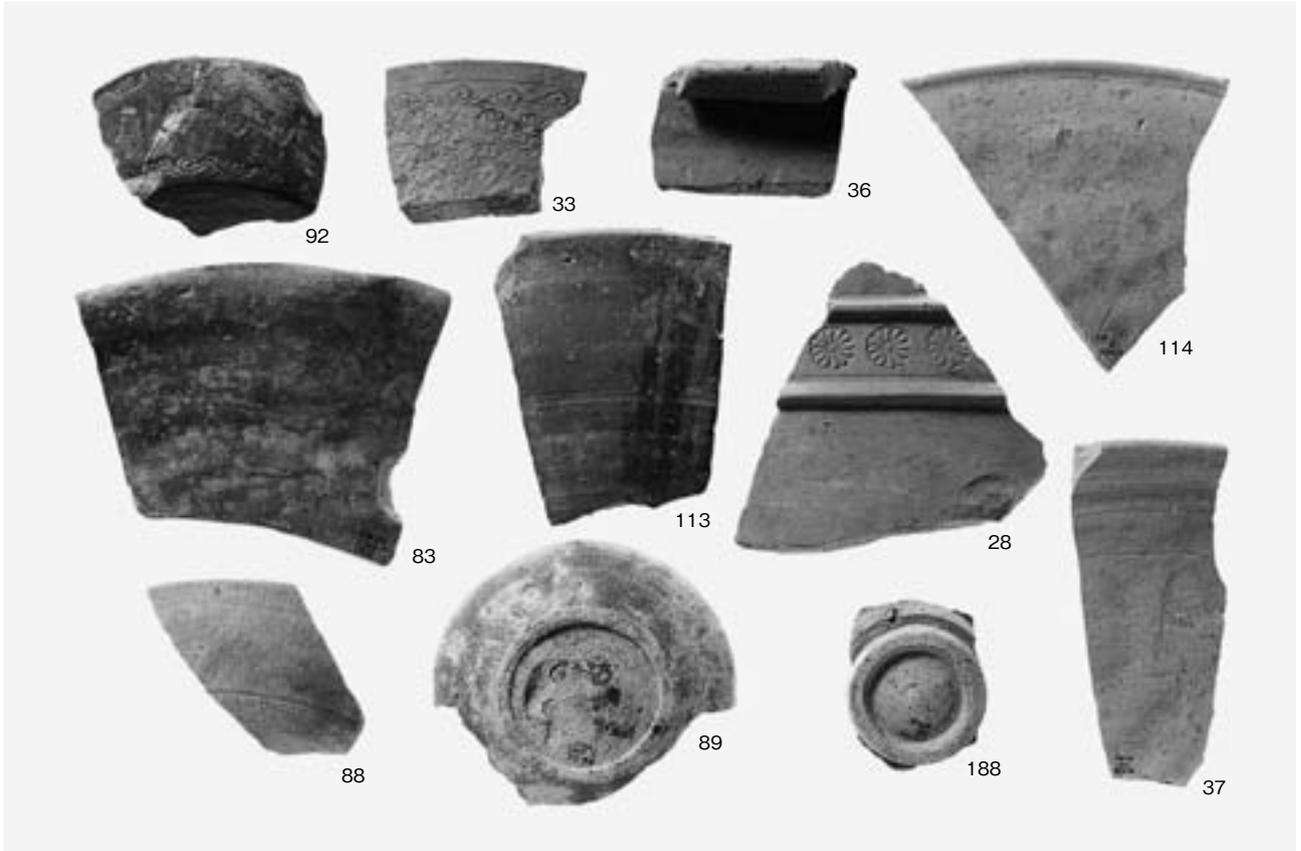
(2) 出土遺物 (3) 中国製陶磁器、内面



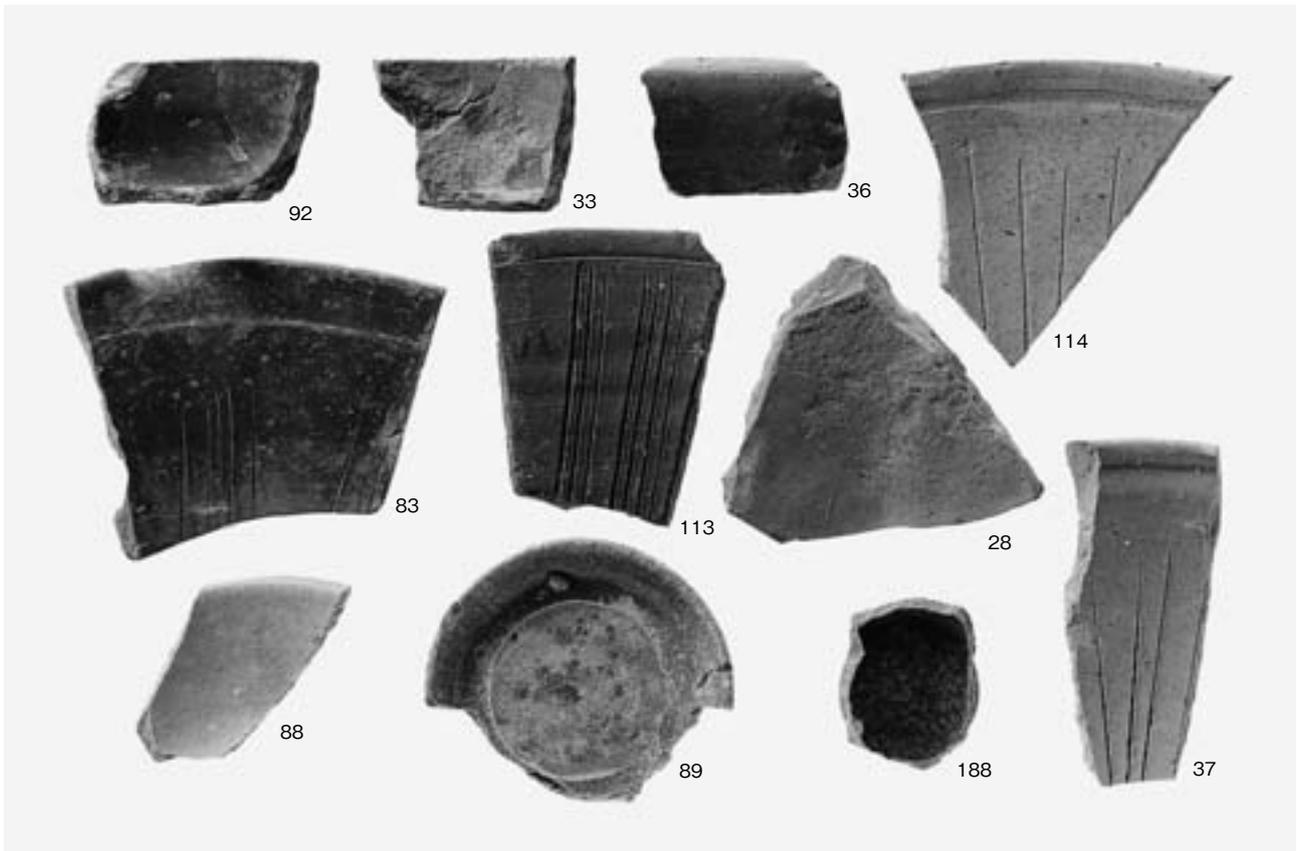
(1) 出土遺物 (4) 肥前陶磁器、外面



(2) 出土遺物 (4) 肥前陶磁器、内面



(1) 出土遺物 (5) 土器・国産陶器、外面



(2) 出土遺物 (5) 土器・国産陶器、内面

所収遺跡名	要 約
俵野廃寺第2・3次	飛鳥時代創建の古代寺院跡で、礫敷き遺構・瓦堆積のほか、寺域東を限るとみられる杭や板で護岸された溝などを確認した。出土遺物から、寺院は平安時代中期に廃絶したと推定される。
戸田遺跡	由良川左岸に近接する12世紀後半に成立した集落遺跡。養和元（1181）年頃までには立荘されていた松尾社領雀部庄関係文書に記された「富田」「とた」の一部にあたと推定される。
新庄遺跡第5次	亀岡盆地北端に位置する縄文～鎌倉時代の複合集落遺跡。古墳～平安時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか、周囲を堀で囲まれた大社造りに復元できる鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出された。
長岡京跡左京第527次	桂川と小畑川の合流点付近にあたり、中世～近世と推定される溝のほかには、顕著な遺構は検出されなかった。

京都府遺跡調査報告集 第132冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141